



本文抜

《 /社会的価値観からズレ/天才的な詐欺師/菜穂子の真意/夢をもつことの残酷/
表現とは内蔵をみせること/ウソはついていい//リンダリンダ以来の表現を行った神
聖かまってちゃん/クリエイター映画/ 》

風立ちぬと神聖かまってちゃん ～「美しさ」を獲得するための愛と憎悪の物語

語って欲しいバンドを語ってくれない音楽雑誌やライターに我々、は反旗をひるがえそう！

これは、神聖かまってちゃん評である。そ、ニートの。。

音楽の文脈を知っている音楽ライターが書かないから、

20代のks底辺が違った角度から「神聖かまってちゃん」評を紹介します。

今回は、映画「風立ちぬ」を軸に、神聖かまってちゃんについて語っていきます。

風立ちぬ と 神聖かまってちゃん

「美しさ」を獲得するための愛と憎悪の物語

もっとも偉大な人とは、自分自身の判断を思いっきり信じられた人たちのこと。——もっとも馬鹿な人も同じだが。

(『ヴァレリー・セレクション 上』平凡社：二〇〇五)

これは二十世紀最大の知性と評された詩人「ポール・レヴァリー」の言葉だ。

宮崎駿の長編映画『風立ちぬ』（二〇一三）には原作がある。そのタイトルは、原作者である堀辰雄がレヴァリーの詩の一節を訳してつけたものだ。

映画『風立ちぬ』は、実在の人物である堀越二郎をモデルに、堀辰雄の小説『風立ちぬ』をベースとして、宮崎駿の思想が加えられた作品である。

内容をざっと紹介しておこう。「堀越二郎」は、↓

内容をざっと紹介しておこう。「堀越二郎」は、少年の頃から飛行機に憧れていた航空機の設計技術者となる。しかし初めて設計主務として携わった飛行機が試験中に墜落。あるとき、軽井沢で「里見菜穂子」と出会う。二人は恋仲になるが、菜穂子の病気が進行していた。大正から昭和にかけて、激動の時代のなか、航空機設計に情熱を燃やす二郎の姿を描いた作品である。



この映画で印象的だったのは二郎の↓

この映画で印象的だったのは二郎の美しさを求める姿だった。彼は魚の骨の曲線や女性の姿に「美しい」と言って感動する。二郎にとって魚の骨も女性も航空機も美しいとみなせば、それはどんなものよりも優先されることを表している。

ちがう角度から考えると、恐ろしい。↓

ちがう角度から考えると、恐ろしい。なぜならば、極端なことをいうと、一〇〇万円の
札束よりも魚の骨の曲線美に価値をおくからだ。二郎は社会的価値観からズレている
のだ。↓

劇中、カプローニが二郎に向かって「創造的人生の持ち時間は一〇年だ」という。これから分かるように、この映画は、クリエイターにとっての映画なのだ。社会的価値観からズレている主人公の感性は表現者のそれである。二郎が魚の骨の曲線美を美しいとやったことが納得できる。

二郎にとって自分が思う美しさが全てという考え方は、声の感情の無さからも読みとれる。誰と何を話していても心ここにあらずな声は非常に不気味だ。視聴者は二郎の行動と表情のみで彼の心を読みとるしかない。とはいえ、表情は常に凜としているため感情が読みづらく、彼の真意を知るには細かな行動を見逃さずみるほかない。

人をそんな気持ちにさせるのはどういう人間だろうかと考えると、コミュニケーションが上手くない人だ。言葉では真意が読み取れないから、周りの人間はその者の行動や動作からその心を読もうとする。二郎は口ベタな表現者なのだ。↓

↓

世の中美しいものは様々ある。けれど、ふつうなら捨ててしまう魚の骨を見て、その曲線を航空機に重ね合わせてしまうところが、彼の航空機にたいする情熱の深さを物語っている。情熱といえば聞こえはいいが、単にそれに「興味」があるだけだ。

彼は航空機が好きということはもちろんだが、きっと航空機以外のものに興味がないだけだと思う。



彼は航空機が世界でもっとも美しいと感じている。↓

彼は航空機が世界でもっとも美しいと感じている。だから、菜穂子が病気になり、血を吐いても仕事を休まなかった。職場の人間に彼女のことを言えばそばについてあげられることは可能だったはずだ。二郎は（後の）ゼロ戦の設計に成功することが、菜穂子の病気に報いる唯一の方法だと感じてたから仕事に情熱を傾けていたと考えることはできる。しかし、物語の終盤、菜穂子は二郎の家を出て行ってしまふ。



お世話をしていた黒川婦人は一言、「美しいところだけ、好きな人に見てもらったのね。」と言う。↓

お世話をしていた黒川婦人は一言、「美しいところだけ、好きな人に見てもらったのね。」と言う。いろいろな受け取り方があるものの、こちらの考え方に引きつけて考えてみる。美しい姿を最後に消えるということは、永久に美しいことを意味する。

菜穂子は病気にかかっている自分が美しい姿のままでいられないことをさとしたから、家を出て行ったのだ。衰弱していく姿を見せるだけだからである（劇中、菜穂子は病気にもかかわらず、姿や表情は登場してから美しいまま最後まで）。

なぜ家を出る必要があったのか。

二郎は美しいものしか興味がないからだ。

美しくないものは好きではない。それを菜穂子は理解していた。それならばと、美しい姿のまま二郎の前から姿を消したのだ。

やはり二郎にとって美しさが全てだったことがわかる。

やはり二郎にとって美しさが全てだったことがわかる。新型航空機の必死の製作作業は、菜穂子のためではなく自分のためだったのだ。

新型航空機の必死の製作作業は、菜穂子のためではなく自分のためだったのだ。美しさを探求することに（しか）興味がない二郎はそれ以外のことに関心を示すことができない。

ある種、ロマンをもつ男よりも狂っている。なぜなら、「自分は女性を幸せにすることができない」と罪の意識にも似た感情で、男というのは女性に別れを告げる。そしてロマンを追っていく。七〇年代歌謡曲によく描かれる男の心情である。

ところがどっこい、宮崎駿の描いた二郎はちがう。

菜穂子が居なくなったあと別の女性とコロっと結婚するはずだ。もちろん美しい女性（あたりまえだろ！二郎さんだぞ）。数年後に離婚、また別の女性と結婚する。それを二郎は繰り返すだろう。美しいものを探求する（航空機）という価値基準で動いているからだ。

二郎の美しさを求める姿はやはりクリエイターに重ね合わせることができる。人間は遺伝子レベルでインプットされている子孫を残す意識があるという。それが生物だ。しかし、真っ当に家族を作っていくよりも優先すべきことをみつけた人間がいる。それはいろんなレベルがあるだろうが、クリエイター（表現者）だ。

まったくお金にならないのに、「ふむふむ、これは使えそうなアレンジだな」と謎の探求を試みる人種、それがミュージシャンだ。ときにはアダルトビデオを観て「なるほど、このオーガズムはロックンロールに通ずる！」と足をブイの字にする人種、それがミュージシャンだ。



『神聖かまってちゃん』のの子は引きこもりの経験があるという。の子の作った楽曲をみると、内向的で自傷的な歌詞が目につく。その深い人生経験があるから出る言葉は、浅はかな言葉をくりかえすセツナ系サワヤカポップ歌手群とはまったく接続しない。だからこそ、孤独を心に宿す者に強くつき刺さる。

の子には独自の美意識があるように感じる。↓

の子には独自の美意識があるように感じる。例えば、『天使じゃ地上じゃちっそく死』では「もういやだ／死にたいなあ」という自傷的な歌詞とは対照的に、サウンドは高音のコーラスとシンセが終盤に神々しさを放つ。

『コンクリートの向こう側へ（デモ版）』ではロックサウンドではないクラシカルな、賛美歌を思わせる曲になっている。終盤には賛美歌を思わせるコーラスはいつのまにか絶叫（ノイズ）に入れ替わっていて、聴いた後のリスナーの気持ちをざわざわさせる。

俗にあるロックンロール的なバンドサウンドが彼らの美意識の根幹ではないのだ。↓



歌詞の面でもサウンドの面でも、神聖なものと自傷的なものを組み合わせているのが『神聖かまってちゃん』の特徴だ。彼らの楽曲にはなぜか「美しさ」を感じる。楽曲に正と負が混じっているからだ。の子は神聖なものへの「憧れ」と、「おれはぐちよぐちよの人間である」という負がある。ひとつの曲のなかにその相反する二つの属性がブチ込まれている。自分の自意識と葛藤しているのだ。

それをキレイに整理せず、その葛藤をあるがまま出してる点が『神聖かまってちゃん』の良さだ。彼らの楽曲を聴いていると「その二つがあって人間だよ」と言われているような感覚になる。だから、の子の楽曲は「美しい」と感じるのだと思う。《キレイはキタナイ》という格言が（わたしが勝手に思っていることですが）あるように、「人間」の本質をの子は突いている。

かつて「ブルーハーツ」が『リンダリンダ』でやったことをの子はちがう形でやってのけたのだ。

『風立ちぬ』は「美しさ」につきまとう人間の業を描いていた。二郎の作る航空機はやがてゼロ戦として戦闘特化し、第二次世界大戦に投入され、多くの人を命を奪うことになる。二郎の求めた美しさは自動的に負をまとう。美しさには必ず正と負があるということだ。言い換えると、正と負がないものは美しくないということでもある。『神聖かまってちゃん』はそれが一曲のなかにお互い高い純度でぶつかりあっている。

自身と向き合うことが人間の本質にせまるのだ。↓

自身と向き合うことが人間の本質にせまるのだ。ふつうはアウトプットするときそれをぼかすだろう。の子は消しゴムを使わず、どんな間違っただけもおかまいなしに、その瞬間思った通り、絵の具を上から重ね塗っているかのような曲を生み出す。だから曲に誠実さを感じる。

「ウソは付かないようにしている」と発言するバンドは多い。そういうものに限ってつまらない。同じようなところをいつまでもぐるぐる回って、肝心なことは言わないままだからだ。↓

ウソはついていい。誠実で正直でありさえすればいい。しかし、それがなかなかむずかしい。

『神聖かまってちゃん』の優れているところはそれをしているところだ。

自分の内部にあるものを世界の要求する形にして出すのではなく、内臓をそのまま見せる。それが誠実さだと想うのだ。そんなバンドこそ時代を変えていく。

うおお

風立ちぬと神聖かまってちゃん ～「美しさ」を獲得するための愛と憎悪の物語

<http://p.booklog.jp/book/84426>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/84426>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ